

実践研究課題：高等学校における家庭科授業研究

県立熊野高等学校 上村 桂 丸山 香織
 県立田辺高等学校 畠 真千子
 海南市立海南下津高等学校 井川 延子 尾崎 京子 川南ゆかり 松浦真理子
 大阪府立岬高等学校 宮武 千波
 和歌山大学教育学部 今村 律子（研究代表） 村田 順子 山本 奈美

1. はじめに

高等学校家庭科教員と学部家庭科教育専攻教員の授業研究や情報交換を行う場を構築することを目指し、昨年度から県立熊野高等学校における Kumano サポーターズリーダー部（ボランティアを行う団体）の活動を通して、連携を開始した。昨年度は、高等学校における生徒の活動実態を知り、家庭科への授業の取り組みを模索することとした。今年度は、連携校がさらに増加したが、新型コロナウイルスへの感染防止対策による制限が多くあり、それぞれの学校の特性と要望に応じて対応していった。本報では、本年度の活動内容について報告する。

2. 活動報告

1) Kumano サポーターズリーダー部と学校家庭クラブ全国大会（県立熊野高等学校）

近畿ブロック代表として全国大会で発表が予定されている AED 用プライバシー保護シート開発において、特許申請の可能性をもとに情報提供を行った。全国高等学校家庭クラブ研究発表大会では、産業教育振興中央会賞およびクラブ員奨励賞の受賞をされ、家庭クラブの活動には参考になる点が非常に大きい。また、特許申請に関しては、山口大学知的財産センター主催の「知的財産甲子園 2020」に応募され、サポーターズリーダー部員が活動しているようだ。今年度は「絆マップ」作製の授業見学を計画していたが、新型コロナウイルスのため、実現することが出来なかった。

2) 高齢者体験を用いた授業（府立岬高等学校）

本年度から連携を行うことになった卒業生が所属する高等学校である。

大阪府立岬高等学校では、「視覚教材、体験学習、調査学習を用いた授業を行い、ユニバーサルデザインの考え方を身に付けさせる」ことをねらいとして、家庭基礎「共生社会と福祉」における高齢者体験を取り入れた授業を構想、実施した。期間は11月17日～12月8日、対象は1年生6クラスである。

全6時間の指導計画を下表に示す。

区分	学 習 内 容		配当時間
第1次	バリアを感じている人の体験	高齢者体験 バリア体験	1 1
第2次	「1歳までの子ども」を理解しよう		1
第3次	住まいと町のユニバーサルデザイン	住まいとユニバーサルデザイン 町の中のユニバーサルデザイン	1 1
第4次	ユニバーサルデザイン製品を提案してみよう		1

この授業において高齢者体験は、生活においてなんらかの不自由さ（バリア）を感じている人として高齢者の身体状況を模擬的に体験するものである。写真のような装具を生徒が身に付け、加齢に伴う視力や聴力の衰え、関節の曲げにくさや筋力の低下を体感している。この体験の結果として生徒は、「階段をエスカレーターにしてほしい」「大きい声で話してほしい」「席を譲ってほしい」「ボードに書いて見せてほしい」「段差をなくしてほしい」「手すりをつけてほしい」といった生活環境に対するさまざまな要求を持ち、第3次においてどのように住まいと町をデザインすればよいか、様々な人に対応できるような工夫を考えることができていた。この装具一式は大学から貸し出したもので、貸し出し時には使用方法についての簡単な解説を教師に伝えた。高等学校での使用後には授業の様子を具体的に報告してもらうことで、教材使用時の細かな留意事項やさらなる活用のアイデアを共有することができた。



3) 公開授業参観（海南省立海南下津高等学校）

本年度から共同研究を実施することになった。複数年度で授業研究を行っていくことを前提にし、初年度は教員との交流および生徒の実態把握を目的とし、公開授業を見学し研究協議を行った。今後、講義科目で体験や実習をとり入れ、基礎学力をどのように付けていくか、連携して検討していきたい。

① 家庭基礎：基礎縫いの学習（10月21日）

学部教員1名が授業見学を行った。中学校で学習する内容であるが、経験していない生徒もおり、今後受検する被服技術検定4級を目指した、まつり縫いについて学習する授業である。教材準備に多くの工夫がみられ、生徒が参加しやすい環境を作り出した授業であった。チェックシートにも実際の練習布の写真が用いられており、生徒が記入しやすいものとなっていた。

② 生活産業基礎：現代の生活・生活課題と住まい（11月21日）

学部教員2名と大学院生1名が授業見学を行った。加齢による機能変化や行動特性を考え、高齢者疑似体験用具を用いて班活動を行い、高齢者に求められる住環境について考える授業であった。班ごとに見守り教員が必要であり、家庭科専門高校ならではの工夫がなされていた。しかし、家庭科以外の見守り教員では、授業内容理解度に差が生じ、高齢者体験時の生徒の素直なつぶやきを拾えていない場面もあり、複数で授業を担当すること、他教科の教員が授業協力することへの難しさがわかった。

3. おわりに

学校によって生徒の実態が異なるため、共同研究の連携校が合同して事業を計画していくことには困難さを感じるが、学校現場の要望に応じて今後も家庭科の授業が充実していくことに寄与していきたい。